チ多13
1659

1659

序

文化六年 僕東都に来て頃年情学
家を遠て所々に
あそぶ。去る韓辺に
ある人の辞か。
多ハ人の夫りを惜ム。當ハ
枯風い枯を
ハ人を枯ても又
同じ。去る時 就藝の

遊歩する人多きなかにて。常に物を
言ふる村上彼哲ハ。実性自然にて
物を学ぶこと。ひとへに紙の吟ずる通。
其名著聞。写ずるまで。ほとんど
俄て人伎戯ハ。寡りに熟嘲ず
ず。年忘れ色に固執あるまで。
四時ともに俗衒ふ。等閑ん

陳列ずる。其遊句ハ青紙に短冊
御覧ずる。五十行ばかり一文
字を投ずる。四神時に梅ぶ。
冬に寒れを寄て。面白の大節
を懐ずる。世に結ぶ客格
ハ。箭名やこや撃を上て成程
上ずと豪補めハたる。然中ずと

逆とて。金雞延毎に鳴てしる番鶏
は。一二ふ。笠記さすり。竹行
をとこまび。梅未に彫せ。何の序
紀一鈴を。翁てよの。雪流じて
此。笠ば。えをきうん。何を奇
中の。笠ふ。ぐく。帝も。相言の。戦
俄八。成をと言へ。夫ふる

撫てなう〳〵。富士乃ぶけ。一流
ふ感。腰を。仕ふ。見て。け。冊子世
に。弘〳〵。第迄ば。撫者。れ。義。名八。益
鳴。を。信。雪。様八。桑。見乃
為。ふ。笠。を。彼。所。ふ。様。貨
猛。為ふ。役。け。孔。寝。ハ。おけづふ。
倉。庫。と。鳴。ふ。ん。年。鄉。言の。ふ。ふ

為ずふがめくゝ成るべしとて便ゝ儒
義を捨ずして儒ゝ先教を弘
らするゝ先ゝ儒
皆天保之年やうひ吉辰

十方庵
梅ゑむ

巻之一　三二書史
巻之二　扶桑史
巻之三　思案外
巻之四　大三十日　観世水　深世ふかり
巻之五　ぬるふ新　尾上の紅　鬼やらひ
巻之六　惣同録　巻之三　風の先祖　小ふ野の月　巻之四　世の歳　おくれ咲

菊王
村上
本虎

角井
原弟
淀川

田作
又作

田鏡
三吉

凡例

おもてなる浪花にみびす祭に係てふもの監獄に
いつまでもとまりて怨たる神社岩戸びられ産神に
を祭りて係いつ人孤はさ堀川流の時に出さる
つぎつぎ孔たる式に鎌倉武将軍の前に出たる
敷の御官方雲の勇呂利が野狐に俄に来
拝ハ面白孔古受附ふて更に尚らびに八義祭の
仮宅にはまて係ども男八出てまつく孔古そて
そ部にもあん係吉陽稜ら白の人酒奥ふ等ドて

乃歳ゆゑ古紀文に見へてをいつの頃よりの事歟
渡辺の先へ渡りと唱へるを淀川八系或八多杯の情懐
はるかに寄言にて武蔵野の広野
雷の海と形りて唯おもふ事を拾
とゝの云るを此所にて見へなき唐の犬拾ひ小虎の
田へはくゝりの法動こゝ所也こゝ舟に乗和歌
花うぶの花菖蒲ゆめつゝ顔七月の由良の人
ゆゑはたらちゝ拾ひ名高き立ものゆゑけるを
彩雲筋のこと形りて其所色里に赤手へ拾ひ

歌句を形とゝのと歩めぬ事面拾ひとる人げ名高
高しとゝ人ぶもゝ海でのを夏も多りて沿る市代の
絶でゝに去年より小ゝ陸小歌句を形
中国の仁兵衛といふ人姓名こ絵を入るゝ古人を
尚つゝ人なぶも慣形らぶ唐土を姓り小ゝいふ
ゆの日本ハひのもとゝ開事ゝ変ゝ尚有ゝ
織者の涙あゝ人の心の分十人かゝて家に其ゝ
なのゝ彼ゝ思ひつゝゝいづもの姓ゝ儀が家祖
ゝ縁ゝゝ有ゝ形ゝ兵衛

小六郎を見たる人こそ累なれ婦人墨子の
淨文を生ずるなり梅おをおすする孫一世代に
添ひ水云物なれん俳諧なれども遠の者ハ
北之百堂隆巴の古種あるも一演ずる所作意
風流を傳し南ハ柳郎云ふ一個の上手なり
文人の上手も有文盲の名人なれども南北に
聖孫郎云ハ連俳迎淨瑠璃ハ孫の習狂言
文句を作ることあるに上手也弟連とせけ
藏能の人伝事を孫て徳岡郎ハ孫の名人なれ

を
ひ代多ふ生ず物の開帳祇記又ハ寺社の
安進ぶ日数を長ひせ殷場の元素を用ひ
毎回歌句をして其風流を出ひこと歌ハ
堂島の俗去北船場の為平郎一度用ひるを再び
せぶれ社風流や伊人云ふ〻の世色の風流出を
弟子西俗ハいやしむ安ふ〻や浪ふ名人なる〻
人事ふれど流ハ歌ハ〻ハ世業の
好事男人のせざるる殷流ぶ好元見ぶ歌維といふ
安郎ちまぶ東西南北郎好事おのぶ心の俳郎一郎郎

義をかしまる社うとてしかの物の其伝形ちを伝へ
探ありわら嗚へらること毛其者毛ゆ所ゆ
よりて変る変る浜荒の伝ハ江戸の菓舗去年
みちの七年の冬ふらびる即世に出しに付る社伝とふ
年意形らん示ハ逢強て人もるる所の新句り俄
又ハ何の菓子菓子を取しを使て世義拙ふて
もさるる変る毎こ祭の軒付ふ二組こ組ゆ
海の角より是富ハ菓子の所なるとも
が形ふ不風俗ありてよ世ハ言ふ思人の言ふ

痴漢が面白ごれ地形ちとハ頁也伝を見せるゆも
面白ごる人の角故おのが新句ゆ地形ちを取と思ふ社
思形ち菓也むち仁革こ俳優ゆ言ふ形ち
狂言ゆ新句ハ婦女子ハ叶ハ子ねば伝ふ
うらびていしゆ也取や伝なぶ一付の真を伝す
子年こ男ハ示通伝っておうこ者ざ伝ら
其かひ形ち十五ふ子頃ふ世葉を面こ拙ふい
乙が思ひ附の物ふ伝顧ず世菓の古ふ面也
為五高ゆ形ちとるて北て泉去菊ふ八弟連

袖岡松と並びく世を保をせ〜長さだく松しに
は業ぶる〜敬人〜那の四季に小株長泉水流
芦橋松ふ性人ぶ世業を占ん役者〜に
後世忍べ〜上郡平源川〜る一人歳に俳
角井ハて性に稚也本虎の俗意字松を寶
天宗菊の源乗松の好ん生業ハ也雲に保をける
長〜年ぬ松武水長月に却て踊く踊る正月
ゆ〜る踊長辺家に松葉彼に の家貞〜に
松ゆ〜る踊く一月に七段に見なを〜びもの一

那の保に限て世に人倫ゆ〜る〜に嘯〜さ〜
保をゲ那新〜記新句を〜ふんと〜を降く長と年ぬ
家保に人倫ハ能狂言に能ば那葉ぬ〜あらば
古猫に〜〜〜〜に両輝城の松おう〜と謡わ
ゆ〜る〜ゆ世に一葉を松ぬ〜ふ夏の山業を
学ぶ〜の雑〜松ハ保ゲ那ば古業に葉松あれの
又ハ那葉青曲松の己ゲ保ゆ〜る〜ゆ春ば末を又せ人と
ゆ〜る年ハ〜ゆ〜ぶ自ら那ゆ〜ゲ早〜我四長に平
み〜も過ハ〜ハ及ばゲれの古文を忘れ〜待も春く

石橋の獅子を彫るもの紀伊橋ゝ彫る像の頭面
本業を彫ひるて像形を言ひ〻て背面
年慶郎比素の形おゝやりす時橋ゝ形小を具を仰
ゝを附て見せ也不風稼ゝ面くいおの〻彫りて
ゝく其姿ゝ又ゆ往よつゝむなゝ畳接療法
拙麿の不作がゝく立面りに彫れの具〻絵言
手を今〻姿の彫形ゝ〻ゝ彫ゝ橋の言彫り彩
雖ゝに善盡の琴弦を言ゝ欲橋をあつゝくなるも風
稼也像の背ゝい言ゝ出場を彫ゝ彫ゝ姿

自ら彫刻を彫〻〻仕ゝ役者ゝ言ゝ紀往ゝ
像の姿ハ楽役ゝ彫ゝ〻ゝ其役ゝの情を
先遠者ゝ役ゝが言彫ゝ言ゝ言ゝ言
冥ゝ言ゝ共ゝ彫者ゝ彫ゝ頭面ゝ言彫ゝ言
省略の仕ゝ言ゝ彫ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言
ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言
其役ゝ遠者の復仕直ゝ役像の役ゝ姿言ゝ言
三体ゝ言ゝ言ゝ言ゝ世ゝ役ゝ像ゝ言ゝ利ゝ言ゝ遠
言ハ一頭ゝ孫ゝ遠ゝ言ゝ役ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言

孫也釈仁勢の子なる故かの風流雅致に切て
まさるべき人耳為に西の方絵に筆すさび形ふて
そ人物の情の深き事感の鰹の料理を入る
宗雪の朝に雪を恥る且形勇猛妻子を憐て
くの為に有て家をぬけ出ぬ也係刈彼絵のめをみる
有情みて俄の頼係に安係の青雲といふ有
貴ぬを思ふ人家人帯しに泉吉年連舟岡の
三子に限る也不習て性とする物にて学文難し
故に藤原の掟を不学とい入る社

冥利の世に係を忘れ考へし我躬の
中に生れ形ぶ孫に知者に狂心深して
ぶる者有彩に家に生ぬ者也さぬ家群を
招待の君子社に見好者にて其名聞
知なまに社恥し故に家友を取せめて仕
くの一切も漢詩歌の祝詞狂歌等形殺句
家中貴賤に風流自ら備ふ母こと己が文育
を後悔して常にもる変也さらび好を孫雪の
山に家俄の孫を捧て其孫に其

文の詳なるを見バ楽しみうすしと有に任せ是迄の係
選を見るに此業をとゞめざる君子の選にして四方の
係の草稿を集められ物故何ら弥く無う落し名著ハ
文意残らず好まれ是を見て係に思ひ出したる
体なる似ぐ無ドなまうし且ぬんの教授もあれ
みしくハチド云杉の末と悔ひ哉

天保三壬辰仲夏

村上杜陵謹識

風流職天狗巻之壹

三番叟　□梟子　△丁兜　○番頭

このげちくちやうちさ△丁申し差図なさる子にお帰りなされませ又おしいぶ
けちらとまれ□梟これもてアなぼうな者じや連中は無んぐ居る
取る事くそやお帰りをなさもとねせんと隠居さんがやうなう
ごはうまれと大さなおるで継がおんなるのへといつさ△丁番頭
さんがやうのつく喉ましてうへて云でおざう侍しく□梟おもんな
非雅なるすがでこに有物で承れは部罵男の景気見なさござふ
じやおもちろ手お聞さがどんな物じや△丁そうふひ面白ひきんで
おざうま両はナアなアや中々見違ふうへ遠ひすかうのく□梟あ面白ふ

いつぞ物見藤や家相を盗人の歩り〳〵て手柄ゴ本と一ぱい
いへる物ゝおもゞ衣装見さう△ゴ豆元揚でおざらまん
ナアあサさんと役者ゝ相ねゝ浦〳〵□ゝ〳〵振ぐおい
でるのゞやゞ歩連中といつゝ若い輝の背長ゞやいやん△あ
ほゝゝ大関ゞやと云ゞやおざり浦せんゝ□何ぬうんぞアノ
衣装ぐ三十両ほゞ〳〵〳〵者ゝんちゝ内でいつゝ△ハアモ
根をまゞ老形さふぬゝいつて代官やゝ母〳〵いつゝ来母〳〵の
ゞやナ□あゝいつゝ分者つゝ者のゞや△モンゝ〳〵お内ぐ
おざり浦〳〵ゝさゝ〇ハイお帰アでゞりまん代官ぐん
ゝあんぐゝ〇達ゞや今ゝ〳〵ふ衣つゝの△ゝ旦那さんでおざり

浦〳〵〇伝の百姓旦那ゞやおのゞ怪ひ奴ゞや今ゝ〳〵ふ衣おつて
ゝゝやせん〳〵△モン旦那さんゝ〳〵いつゝ居まん□伝
おゞやゝ〳〵ひぬゞやドレおゞゝ〳〵長吉ゝ〳〵居て居
トゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵といつゝの△絵ゞやおゞゝ〳〵ゝ〳〵の
アキヤ〳〵〳〵チヨン〳〵チキチチヨンチキチチ〳〵〳〵ゝ〳〵
ゝやいのゝキリ〳〵チヨン〇旦那たゝ〳〵ゝ〳〵れ傳迫所の
ゝ前ゝ形ぐ西ゝおざりまん△中旦那さん嘲の恵ひ梅子
本ゞやおざり浦せんナア□ゝ〳〵ゞや能ゝ〳〵るおゝ〳〵檀ゞや〇
嘗ゝゝさんるゝ伝ゝ伝のゞゝ相ねゝ〳〵ちゝ口合ゞ〳〵ゝ〳〵て□ゝる
の〳〵ゝのゝゝゝゝゞ内ゝ〳〵ゞ衣ゝつゝのゞや家ゝいつゝん形んゞや

都人せや
かき捨ら
神乃
ようけい

○〽こなたハ此店の支配人忠兵衛様でござりますか△〽さやうでござり

ます□〽旦那ハよくおいでなさつた□〽あれキヤア／＼／＼「チヨイ／＼チキ／＼チヨイ

チキチキ／＼はやしやがれいなし ハヱイ ○〽ならで

ありがたい此方ハござりますればご免を蒙つて申しますが此ところ

よふも門に居ていた此主人へ島渡の御見を申上ますれた

様をはじめ此てへ好の御家督相続及び隠居してござり

ますれハ先旦那の時ハ十一歳より此頃の御後見人お目見え

仕り申して至極不調法なる者を旦那様のお世話にあいなりまし

当年が廿二歳一両金の内ハ当家へ這入仕り候て来る

てへのお家の中の様子へ入まゐらせ恐ながら申上るれ

△〽忠兵衛が申して一向倅が気ま□〽あれハはやくさばきがついたナア○〽娘

御子△〽娘はよくおいて○〽何めされおじや□〽家内も今の此

待いふのじや主ナるいで気が遠くさかつて思ふて近所の人が引合

せがいるぞへ○おれさへ是見して家のも後見先様じや△中

丸ひの鶏が鳴く居られ○それなら宜そうなのじや□〽あなくハ

むかひの鳥く△〽間へ出るとも○アアお這入なされ□〽直に

這へ由せよ○〽こなたさ□チヨイ／＼チヨイチヨイ

へ出言たをとうさげ二三十両支度ハおのれハなにくひ長吉ぐらいどや□〽おのれ

ぐまふ丁児ほど育て大ふ辨当ぬしや○そんな志ちうもなんぞ

おつアやるかいてあんなもの仕おつておのれが死してまするれ△〽忠兵衛

いつてろおあれ自由ものらぬ〇おのを呼ひぬどやいけを清人を
〜〜で来ふうどーわふるいで又さんぞ□ものるひこんの□エイ□〜
エイ□〜エイ〇〜エイ□〇エイくくくくんとこいはきどうの。エイひとこいるごものエイ△イナア〇
舌の舐のと何ぬうんのどや□苦ゆふ叶らんが結ひなつやらけと
個差〜〜こつて酔ふて居るのどや有ふナア長吉△左程どやへ酔
こんのどおんネチャルのどや〇〜ハアそんめどこをハ酒の酔を
こ書史とそんのう

巻之一

△医者　□指二広釈仁

あるのようさふーんうけるやーびつくこくきふ入ある△医ハアぬかトぬ
ここふむをおそをいけるのどぶんぬ出ーるゆーるるる
雷鳴ふのうどや早でハ病人げもまるを苦どやげをおっるを苦い
人が病毒を会魚るるハ更ふ仁術でちるっく不実ちるどや
其報うせるうふ好ーが病毒どやげ今日ハ大ふ結ひ候ー有げ
けうんてどるも形らぬ指广のちをほ咲ハく呉よフウ完
今来るうーりー□図形さん方を落でおざるとをを大さふ逆よ
ありやのーさ△ヨ方線どや今ハ出ようひるの□たを程ごごるまん
紅ーハ雷ハ大鳴ひでおざうを西ハ△医ろ程も雷さらひう□をけハ
ぬぐおざるとを西ちるとど雷ハ鳴ひでごるうを多ハ△医ハ雷と
一ワふいるる物うんハ何ぬどや有ふあ□おぶ立ぐおざうを多せふ
△医七ハ四ふ四ろ貝思六ろ物ら風どやナア□そうや地震どやござう
まもんう△医ドーン地震と雷ハ逆もぬ中どやもんう□あほふーしい。

時に先生さん此間ハ御不快とあつてましたが△医サアこの頃ハどうも
病人が多ひ事ドや併し此頃へハ療治をいつてこぬコリヤわしが
七が迎ひぬ様お子高ひゆへ甚若ドやが此方お病気が昔ひと
いつハ積気と病人があひふつて人の疑ひするぬ事だけ收んで
居る□梅あんの去ふしぶるすが有て△医併し冷の時分ハ冷るがよひ也
不順あつて今の振に雷鳴るドやハ□梅あんかおうといるすハござら
ませんが△医是ハ雷鳴のすいやお子が吉子のドや□梅あんお猫ハ雷
乃口に来ませんぞ△医サア療治しやふおい肴おはドや子ふゆへんぞ
ム見巨燵で住く茶人とけふ紀をするとめふでおびとすつへにまゐるを
そうへうる医者をとりくふるみる
□梅めし二分りまし也中口の方に入るくおざら博士の八分でおざら

はす△医あとハ合槌ドや□梅因梅さん埋もやぬ灘つておざるまいか△医ハア
淵つく有り□梅何れとそがそうもせんか△医きつふちゆう有がちの
やう多老人あへとあうとぬ□梅そうや文調ゆへでおざるまいか△医灘
てへ祖父さんまあさいすドや□梅あるさの口合も医者しいのドや
甚医者しん次手に私も医者に成ふおざるを心でおるさの
お身子れおさかくへ下さいよせんう△医悪ひ口ひ附ドやよしふ
夫うさが醜ひ医者といつそみハ夜りぬや何様まひと任どや
麼村が安ふあるく青ふかるといつおさ正月言ドや安芸たるハ
年中まひ頼ドや□梅もしハ何ゆさに附あれて気ん上と存まれ
△医憑けるひまつ程が附あれて是とく叶ふものゝ□梅かが附あれいたら

けつくわかくさゞ流りらてとゐまに〈医〉はやぞいつとので□者人
俳〜て医者為る人〈医〉困さ物ゞや若ちゐ者ゞは合いへばゞやるひ
ゞやゞ係〜てちハ能ひ臭ゝゞ有て結構ゞや法ゝ者ハおゝ法
おゝゐ者者ゞや□いゝ〜法ゝ乗ハ悴ゞやおゞう西せ乗でゞゞと
有ハ〈医〉ゝう者ういつ若や病ゝ者ゞく有さゞ完能ゝ成ゝう□たゐで
おゞゞう西ハなゐさう西〜て者ゞやつてゐ業有賊も
者〜西〜ゝるゝゞゞゝと利ませぬ〈医〉ゝゞゝゐ者ゐ利ぬゝゞ
ゐゞゞや□法のまゞゐゐるゞ有て其法新屋のゞゞけゞく
お性〜ゞおゞう西ゝないつ若ハ髪結ゞゞゞ西分〈医〉ゝゞまハ
結猫ゞや今法ハ多ゝ人の婦ハ髪結ゝ結ゝゐゝゞや□ゝ

其婦と往〜ゐて〜ま〜ハ〜ま〜ゝ居まハ続の風おゝ〜
富人おぼ法ゝゞゝゞ西ハ〈医〉ゝゐゝ経ゞゞや有ゝ者ゝの
ゝゐゝゐゝ□ゝゝゐ夫ゐ法ゐて〈医〉ゝけ□ゝゝゝゝゝゝゝゝと止ゞゝ
ゝ〜ゝゝ□イヤゝゞ法ゐゐゞ法ゐゞゞ法ゞゞゐ法ゞゞ
ゞ法ゝ面ゞ西ゝひ□ゞゝハ法ゝゞゞゞ法ゞゞ
西ハゞゞゞゝ法ゞゞゝ母ゐゞ法ゝゞゞ法ゞ
ハゞゞゞゝ法ゞゞゝゐ〈医〉ゝ情ゐハ法ゝ母ゐハ
ゐのゞゞゞゞゞゞ法ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ
ゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞゞ

文伝堂

手ますから□抜そりやアお足が冷まするに失礼ながら足をすゝせ
をもつをさらけ出るおへあて医△コレ宗匠左様な事ハ癇症じやよわいくらの
常にきたなきむさくるしさの体ある□抜ヘイ癇症といつハ皆気儘じや
様なるもの穿と気が悪ふなる
おぼろも酒せんろ△医サア其足の如くしやんと人がおでゝも足でも
傍にみるとおふんが無心でもいつもとなりおやまが落ると思ふもち
おこる事と拙者の疵に知らぬら□抜わし文なきさハむら白うじや
よわくら病しやう気ハ耳と足ひえしてから人ゝがしたなさんハ如ん
しやう性なれでおぢるも酒の事△医それ拙者ハまた知らん志ち気じやけ
□抜あ団らん△医そうち治る未の病ひハ通らぬ気じや会のくふ
拙が今ひちりと食事を拙へたし〆ぎ能ひ□抜まづ頭寒して悦うらぬ

跡は前のわし所の茶代壹匁六分喰倒しさ△医嘘をつきなさると
後から二人来て其様に茶ハいらぬ筈じや其ハ無益な事も小づらひも
一つかして一年中の入用と俳国の勝る物やら人様と算用と
御意得て□抜御尤わし学文を弁へねバ縁遠てぬるつるすれちがひ
先生様俳諧の論ハ扨まされ下でも世帯の論と算盤の八咲
ひとつあるハわし所ハ茶代と其の外へ入れましての方ハ
ちよろく六年代を此年へ銭集一匁入用く跡が間違ひまして困り
扨そこで一ちよろく六年銭集て高へ国家帳記の住居て夜抜
しかるに足ずさ来る西へ△医それならすせめが鈍ひ功者な人に
相続しかるに住所の首尾の性ハ道により買ふし□抜銭ハなうられ

手足が不自由な△医者「何じやのどや顔の五面に強いしみがある
そんな陰気な事ばかりいつて居ると逆上て来て肩ぬがして居れ
くトバかりや□按「ゑいかほうてまけな事ひおに肩ぬぎめがかたの風邪さ
おんぞく△医者「何じやあらいんが頭が割るる様な□按「そうりや頭痛でござり
御せう△医者「サア頭痛く　浄るり三味せんツンツンてんてんあるろうさぬぐ「治定之の
困窮一く絶えんで□按「絶てし絶えしたる所んしやく△医者「家和の形相
たちまち裏で□按「治眼病ハ是くだも△医者「何じやのどや殊んなの
眼がだもろく首の影が出てみくおとちんば桿でも人中でそんな
すべいつて笑ハぬ方が能ひ□按「デ毛あなたの近眼で家うふ白眼ぬ
えやかても皆様の走人ハ面中すせぬ△医者「何じやのどや人お眼乃小言

斗いつておさいましい御んせ□按「是ハ大きに不調法△医者「ヤまたいふ
よふきくんき気治る為お身の気分お宜敷いぬ此勝日□按
「銀が無くさば是非とも誠されず△医者「あゝいふさへむずかしき刻
らず食は会常あやまし□按「何お治る薬どやて会席にる
因ず唸やしません△医者「命ハ別条ありません□按「何かさし殊んぐその
中うふ後が立ませんか△医者「サア気遠ひよちる下地がありませんかね
世の中に後がたり天狗山どやちうひなりませんどや□按「中
く俺さ呼ませ肩お入りさい臍とられたら悪うござりません
△医者「人のるゆ身のふ事ハあの「ヤアしくおんたを云ふ雑説を写
うへハ俗呼ぶよく甚ずハ函へ帰つて情出しく薬を凄ぐ

ユまをいてさせ□おんなを世話ゝこと英くんでもたるの者の乳母子にて
入ゝ長つもせべ〳〵人の情を面白でぬが殺ひ拵ゆ迫つゝ長文を
ゞや〳〵ゞ長ゝ長ゝより根を拵を拵き侍藤ゆ貴彩おとゆ入を
玄伯侍毛ゆ明医者づゝ長ゝとゝ引ゝ拵ひ〳〵ゆ〳〵〳〵
ゝ紀むゝの花もて□
ゝ長ゝのゝ人ゆあゞゝ□あゞゝも義ゆ伝ゞやコリヤ伝でゞゞ
ゝ侍ゝ〳〵ゝ神寿遠ひ自則ゆゝ〳〵□「医者ゝ人を医者義
痛の命〳〵医者ゝ代の柳おゝ〳〵ゞや

風流俄天狗巻之壹終